Antiautoritare Erziehung in der Kinderladenbewegung und die Padagogik der Gegenwart

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/591

反権威主義幼児教育の一考察
―キンダーラーデン運動と現代ドイツ教育学―

岡田　正則・三輪　雅子*

Antiautoritäre Erziehung in der Kinderladenbewegung und die Pädagogik der Gegenwart

Masanori OKADA & Masako MIWA

《目次》

1．はじめに
2．キンダーラーデン運動の生成と展開
3．キンダーラーデンの理論と実際
4．反権威主義幼児教育と現代教育学
5．おわりに

1．はじめに

抑圧的・統制的でない教育とはどのようなものだろうか。本稿は，このテーマに正面から取り組んだドイツのキンダーラーデン運動とそこで試みられた反権威主義教育を検討する。

Kinderladenとは，直訳すれば「子どもの店」であり，「子どものための商品を売る店舗」という意味で用いられることもあるが，1960年代の終りごろからは，主に，「民間のイニシアティヴからおこった非権威的指導の幼稚園」を指す用語として用いられている(1)。草創期にかつて店舗であった場所に子どもたちを受け入れたためにこのように呼ばれるのである。本稿は，このようなキンダーラーデン（運動）の推移とその思想的背景の概要を紹介すること，およびそうした実践や理論と現代ドイツの教育学との関係を確かめることによって，今日におけるこの運動の意義を明らかにすることを目的としている。

日本の幼児教育の管理的・統制的な現状に対して，これまでにもいくつかの批判がある。そしてその改善方向として，たとえば，「自由活動の時間を長くする」「競争場面を少なくする」「幼児教育における遊びの復権を」といったことが提案されている(2)。これらは確かに重要だとは思われるが，はたしてこれで十分なのか。フレーベルの思想をきちんと実践しようという水準にとどまっていないだろうか。現代の子どもたちと社会構造との関係がどのように視野に入っているのだろうか。たとえば，1990年施行の新しい幼稚園教育要領は，遊び重視の方向を打ち出してはいるが，「国旗に親しむ」など“教え込み”の姿勢を保持しているし，親たちの利己的な関心に対する批判的な対処方法にふれていないので，この要領も根本において抑圧的・統制的でない教育を目指しているとは思われない。そして，上記のような提案とこの要領との間にどれほどの違いがあるのかは，必ずしも明らかではない。したがって，本稿が対象とするような運動や思想を検討することも意味のある作業だといえるだろう。

キンダーラーデン運動（あるいは反権威主義教育）に関する日本での研究は，1970年前後の状況の紹介にとどまっていて，十分な検討が及んでいないように思われる(3)。一方，ドイツでの研究は，70年代の教育改革や教育実践に対するその影響は認めるものの，この運動をすでに過去のものとして扱うのが一般的傾向のようであ

平成7年9月18日受理
*幼児教育研究者

る。しかし，後にみるように，その実践は決して過去のものではないし、今日なお検討されるべき多様な論点と教育のあり方にとって有意義な経験を提供していると思われる。

2．キンダーラーデン運動の生成と展開

2.1．ドイツにおける幼児教育思想の変遷とキンダーラーデン

ドイツの幼児教育は，19世紀には「しつけ」や社会道徳の訓練あるいは聖書や文字の教え込みが主流であったが，これらを批判して登場したフレーベルの幼稚園や20世紀になって導入されたモンテッソーリ教育法等によって，自発性や自立性を重視し，集団を媒介とした「社会性」とでも呼ぶべき資質を養成する方向へとむかった。そして，戦後改革や高度成長を経る中で，労働的・作業的経験の重視という要素も加わった。

60年代後半からおこった大学改革運動は学校制度改革論へと発展し，これが，そのような状況にあった幼児教育にも及んだ。改革の主な内容は，第一に，幼稚園の拡充政策の進展，第二に，各ラントでの「幼稚園法」の制定等による制度の整備，第三に，多様なモデル実験に基づいて様々な制度形態や運営の改善がもたらされたこと，などの点にある(4)。内容的には，幼稚園で学習と教育が強調されるようになったといわれる。学習といっても，読みとか，書くとか，数とかの能力の習得が重要なのではなく，たとえば観察とか，比較とか，計測とかのような基礎的な，一般的な，または数学的な認識方法の初歩的習得のことである。

キンダーラーデンが登場する背景は，このような改革の背景とある程度共通している。とはいえ，キンダーラーデンが注目されたのは，基本的な考え方がこれらとはかなり異なり，また実験としても徹底していたからであった。

2.2．背景

2.2.1．1960年代末の社会状況

西ベルリーンと西ドイツ（ドイツ連邦共和国）では，1967，68年に学生運動が始まった。これらの運動は，第三世界に西側諸国が介入している現実，ことにヴェトナムでのアメリカの戦争，連邦政府およびベルリン市会による独裁国（コンゴ，イラン）に対する支持，ならびにまた大学で知識や意見の自由が抑圧されていることに向けられていた。その影響は当時のあらゆる社会分野におよび，社会的環境の変革，つまり「全生活部門の民主化」へとつながっていった。この時期は，ＡＰＯ（außerparlamentarische Opposition，議会外反体制派）の時代ともよばれる。キンダーラーデンもＡＰＯ期の産物の一つであり，これらの運動と盛衰をともにすることになる。

この時期には，あらゆる勢力から教育改革の提案が出された。政府は，60年代半ばから始まった不況の乗り切りのために教育重視（経済発展のための教育水準の向上）の方針を表明していたし，学生や知識人たちは，教育施設の拡張，効率化，統一化を要求していたのである。69年に連邦議会は基本法を改正し，教育計画・大学の新設・科学技術の振興が連邦および州の共同任務であると定め（基本法91ｂ条），教育助成にも積極的な姿勢を示した。このような背景の下で，キンダーラーデンの試みもドイツでの就学前教育の諸改革に影響を及ぼしえたのである。

70年代に入ると政治的潮流の転換が徐々に進み、ＡＰＯ期にみられた諸種の運動は後退していくことになるが，教育改革や女性解放運動の成果はかなりの程度定着したし，運動を支えていた反権威主義の理念は「若者たちの抗議文化」（第二文化，対抗的文化とも呼ばれる）として今日まで広い範囲の人々によって受け継がれている(5)。

2.2.2．幼児を取り巻く状況

60年代後半のベルリーンにおいては，すべての者に対する自由と機会の平等というのは建前

だけであり，貧富の差，特権層と被抑圧層という構造が再生産されていたといわれる[6]。このことは，特に教育の領域で現れていた。具体的には，幼稚園の数が少ないので希望しても就学前教育を受けられないこと，親の資力の違いによって受けられる教育も違ってしまうこと，住宅事情（子ども用の部屋，トイレ，風呂等の有無）により子どもの成長が大きく左右されざるをえないこと，女性の職場進出にともなっていわゆる“鍵っ子（Schlüsselkinder）”問題が生じたこと，などである。

幼稚園数をみると，1966年12月末現在の西ベルリーンでは，１割程度の子どもしか利用できず，約１万人（希望者の４割弱）が入園待ち，であった。今日でもこのような状況は完全に解消されたわけではない[7]。

2.2.3. 既存の就学前教育への不満と批判

キンダーラーデンは，幼稚園が過密状態であったことに対する自助的解決策だったばかりでなく，教育（保育）内容としてもアンチテーゼを示すものであった。つまり，従来の幼稚園における主に宗教的な拘束と権威的教育スタイルとに対する対抗運動として生まれたのである。その結果，キンダーラーデンは，「小集団の中で自力で行えて無宗教で反権威主義的で社会主義的な教育のためのプログラム」[8]になったのである。1960年代後半の西ドイツでは，今日と違い，無宗教というだけで反社会的と見られたであろうが，これに加えてこの運動が社会主義的な目的を掲げたことは，二重の意味で反社会的なものと見られたことであろう。

キンダーラーデン運動を進めた人たちは，ブルジョア的小家族での教育の問題点を次の点に見ていた。すなわち，

—自己確認のための唯一重要な対象として親に強く感情的に結びつけられていること，

—母親の胸から早く離乳させること，

—厳格な清潔教育（Reinlichkeitserziehung），

—子どものセクシュアリティーの否認と抑圧，

—住宅事情や親の休息の欲求が原因でほとんど自由に遊べる余地がないこと，

—他の子どもたちとの接触が少ないこと，

—同時に依存しあっている場合に，個人化を通じてエゴイズムが形成され，所有の努力が行われるが，社会的能力は形成されないこと，

—子どもの欲求の抑圧によって社会的能力の発達が疎外され，知性がなおざりにされること，

である。そして，彼女らは，伝統的幼稚園での教育もこの延長上にあると見ていた。その結果，権威的な性格がつくられること，このような性格をもった人々がファシズムを助長したこと（アドルノなどの研究）を問題視した[9]。

それゆえ，まったく新しい幼児教育の方法が模索されねばならなかった。

2.3. キンダーラーデン運動

2.3.1. キンダーラーデンとは

以上のように，キンダーラーデン登場の背景は，就学前教育の条件の劣悪さと教育改革の気運の高まり，既存の就学前教育の内容への不満，女性解放運動が就学前教育の問題を自らの不可避の課題として認識し解決の実践に着手したこと，などにあった。

さて，このような背景の下に生まれたキンダーラーデンとは，いかなる性格をもった施設だろうか。次のような説明が標準的だと思われる。

「キンダーラーデンは，伝統的な幼稚園に対するアルタナティーフ（代替的方向）として学生運動の中で創設された。抑圧的な社会構造に対する激しい批判を出発点として，（学生であった）親たちは，心理分析思想（とりわけ，W・ライヒ，S・ベルンフェルト，W・シュミット），権威的人格の分析（Th・W・アドルノほか），マルクス主義的テーゼ（たとえば，教育の再生産理論），および基本的に反権威的な立場を混ぜ合

わせたものから，自治的で抑圧のない幼児教育の実践と理論を創造しようと試みたのである。キンダーラーデンでの教育原理は，集団的に教育すること――すなわち，個々人の人格もしくは親の意向に沿って子どもを個々別々に固定的に捉えることをしないで教育すること――，自覚的な政治意識を造り上げること，そして性的な事柄を自分でコントロールできるようにすること，であった。キンダーラーデン運動は，その挑発的な性格によって刺激的で斬新な影響を就学前教育に与えたが，70年代を経過するうちに，次第に衰退した」(10)。

キンダーラーデンは，前述のように，「小集団の中で自力で行えて無宗教で反権威主義的で社会主義的な教育のためのプログラム」であることがその特徴である。それゆえ，子ども学校（Kinderschule）・幼稚園（Kindergarten）・子ども舎（Kinderkotten）・子ども集団（Kinderkollektiv）・遊び部屋（Spielstube）等の呼び方をされる場合であっても，このような性格をもつ幼児教育（保育）施設ならば，キンダーラーデンという上位概念が用いられる(11)。

キンダーラーデンの組織形態はさまざまである。自分たちで資金を賄うことについての自由な同意に基づいた緩やかな提携（定額もしくは手取り所得額の10％という相対的な負担）という条件で組織されているものもあれば，公的資金や控除対象となる寄付金を受けるために，社会福祉事業の中央組織のもとに登録される公益団体になることを選択するものもある。今日では，後者が多いように見受けられる。また，カリキュラムについてみると，子どもの自発性の相互作用に完全に委ねるために固定的な時間割を決めないものもあれば，一定の開始・終了時間（たいていは9～16時）や，グループ作業を有意義に進めるための遊びと学習の提案について合意をしているものもある。かつては，デモンストレーション等の政治的な行動パターンを教えたところもあるが(12)，今日では，後に述べるように，「政治離れ」しているので，かなり様子が異なっていると思われる。

2.3.2. キンダーラーデン運動とは

キンダーラーデン運動がその出発点において掲げていた目標，これを担った人々，要求はどのようなものだったのだろうか。

キンダーラーデン運動の目標は，「完全に解放された無階級の社会（下層階級・女性・子どもの解放）を念頭に置きながら，子ども自身が自分の欲求を制御できる方向へと向かうような非権力的関係の教育」[13]にあったといってよいだろう。

この運動の標語は「反権威主義の教育」であったが，その背景には，60年代当時の西ドイツ社会の「権威主義的」なあり方に対して反抗の運動を展開していた学生運動があった（社会の「権威主義的」なあり方とは，一定の知識や政治的・経済的影響力をもつ者とこれに自発的に服従する者によって構成された社会を言い表しているようである）。当時，キンダーラーデン運動を担っていたのは，教育的に結びついたというよりもむしろ，このような政治的信条で結びついた学生・親・教育者・左翼的傾向の知識人たち（主として女性）であった。

そして，キンダーラーデン運動が求めたのは，次のような教育方針を実践することであった。「キンダーラーデンは，最大限の自由を――一般に自由放任の立場をとることなく――保障し，服従・秩序・清廉・性的純潔性といったブルジョア的価値観の実現を放棄する。社会的諸強制によってそれまでに呼び起こされていた攻撃的行動は，子どもが欲求を充足して落ち着きが生じるようになるまで，さしあたり何の抑制もなしに行使してよいのである（壁への落書き，家具の破壊）。普通の子どもは誰でも際限なく攻撃的であると信じられているが，その攻撃的行動は通常，それまでの性的欲求不満の結果なのである。それゆえ，キンダーラーデンでの教育にとっては，目的意識的な性教育を通じて性的なタブーを打ち破ることが中心的に重要なのである（子どものセクシュアリティーを意識的に

促進すること，楽しんだり愛したりする能力を高めるように導くこと)。集団(グループ)的過程としての性的な経験から，集団的な連帯の意味で社会的意識を基礎的に変革することが，期待される。このような集団連帯の促進のために，キンダーラーデンでは，個々の人格を確定することはすべて拒絶される」[14]。

2.4. キンダーラーデン運動の推移

2.4.1. 生成——60年代後半

キンダーラーデン創設の経緯から70年までの推移の詳細をまとめた『ベルリーンのキンダーラーデン——反権威主義の教育と社会主義闘争』(1970年刊)を参照しながら，創設時の様子をたどってみたい。

60年代後半，徐々に西ドイツ社会の見直しの気運が高まっていた。社会や家庭における女性の地位の見直し，いわゆる女性の解放もその一つであった。社会主義的傾向の強かった当時の学生・青年運動に参加していた女性たちは，これらの運動内部においても抑圧されていた自分たちの立場を改善するために，1968年1月に女性の解放のための行動委員会を結成した。そこでの議論の結果，幼児をもつ女性が決定的に不利な立場におかれていることが確認され，次のような内容のビラがベルリーン自由大学で配布されるに至った。

——昔も今も全社会的な抑圧が女性にふりかかってくるが，その女性は，社会の他の人々から受けた攻撃を子どもにしわ寄せする。時間がないために，女性たちは，自分たちの状況を深く考えたりそこから結論を導き出したりすることができないでいる。女性とともに行動を進めようとする組織の中でさえ，女性は単に少数にとどまっているというだけでなく，女性が参加しても男性の参加よりも生産性が低いということがある……。働くことを可能にするため，母親たちにかわって一定の時間その子どもたちを引き受ける組織形態が緊急に求められている。このような要求は，とりわけ次の二つの理由からして充足されていない。

a) 幼稚園があまりに少ないこと。

b) 存在する幼稚園は権威主義的な指導を行っているので，そのような施設に子どもを入れることは子どもたちにとって有害だと考えられること。

したがって，すみやかに幼稚園が設立されねばならない。——

そして，このビラを受け取った女性たち約80名が大学に集まった。彼女らのうち半数が子持ちであったが，学生でない者も含まれており，多くの者が子どもがいるために学業を断念したり，ほとんど働けない状態であった。この会合での結論は，まず，すべての街区に幼稚園の設立準備グループをつくることであった。設立までに時間がかかるであろうから，親たちが交替で面倒をみることができるようにグループの子ども全員を一つの住居に集めようということも，提案された。

このころ(68年2月18日から21日にかけて)西ベルリーンで開催されたベトナム問題会議(Vietnam-Kongreß)も，キンダーラーデンの創設にとって重要な契機となった。この会議には，すべての西ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国から急進的な学生・青年数千人が集ったが，そのかたわらで行動委員会の女性たちは約40人の幼児を引き受けざるをえなくなり，会議に参加できなくなるという事態が生じた。このため，参加者たちの協力を得て，会議とデモンストレーションの期間中，にわか幼稚園をつくることになったのである。これをきっかけに，それまで(このような人たちの間でも)私的な問題と考えられてきた子育ての問題を集団的に解決すべきだという認識が広まった。

しかし，ベルリーンでの幼稚園創設運動は，間もなく困難な問題に直面することになる。自分たちで子どもたちを集団的に保育してみてわかったことは，すべての住居が子どもの遊び場として適しているわけではないし，子どもたち

はしばしば親から離れたがらなかったり，周囲の人たちが頻繁に変わるので不安がったり攻撃的になったりしたし，受け入れに適した住居ではしばしば過剰な負担が生じる，ということであった。こうした経験から，できるだけ早く子どもに適した空間をさがすとともに，親たちは少なくとも週一回集って，教育と組織の問題を論議することになった。さらに，あるグループが場所をさがしてみてわかったことは，幼稚園計画のためには通常の住居（部屋）を借りられないということであった。家主が，他の賃借人の迷惑になることを恐れて貸さないのである。そこで浮んだのが，ほとんどすべての街区に存在する空店舗（小売店）の活用であった。こうして，68年2月，ノイケルナーのグループによって最初の店舗が借用された。それ以来，このような幼稚園を“Läden”と呼ぶようになったのである[15]。

以後，キンダーラーデンは増加し続け，1970年代初頭には，ベルリーンで約200，ドイツ全体では「数万のドイツ人の親たちが千以上のキンダーラーデン集団をつくった」といわれるまでになった[16]。

2.4.2. 展開と衰退——70年代

しかし，キンダーラーデン運動の隆盛はあまり長くは続かなかった。70年代前半には，学生運動が種々のグループに分裂するのと軌を一にして，キンダーラーデンは孤立化した。「一方では，教育の専門化およびこれにともなって脱政治化が，他方では，子どもの政治（プロレタリア）教育についての議論が，始められた。教育と政治運動の結びつきが解除された後に，キンダーラーデンはむしろ個人主義的なグループと社会主義的な潮流へと分化した。前者は，ニールの考えに沿って欲求を昇華させる教育の構想をさらに追求し，今日に至るまで，親子グループやもう一つの新しい幼稚園・学校の試みの中に生きているのである。また，社会主義的潮流は，反権威的なものという概念・構想をすぐに脱ぎすてた」といわれる[17]。

イギリス人（スコットランド人）の教育学者A・S・ニールについては後にふれるが，彼が提唱しサマーヒル・スクールで実践した自由な教育の考え方はドイツにも大きな影響を及ぼした。そしてしばしば誤解もされた。シュピーゲル誌は、このことについて「中流階級出身の無数の自己の解放をもくろむ母親たちは……自宅で幼児についてサマーヒルを行い……，歯磨きやテレビ，レコード破壊やビタミン補給をどうするかという決定を幼児に任せた」と報じている[18]。孤立した母親たちは，この理論によって自由と放任を混同したのである。

また，60年代末から70年代初頭にかけて，キンダーラーデンに対して，保守的な人々やジャーナリズムから強い非難や中傷があった。70年に当時の子ども保護連盟会長は，キンダーラーデンについて「われわれは，子どもたちを系統的に共産化（bolschewisieren）し，子どもたちに国家や社会に対する反抗を教え込み，子どもたちを性的な放縦へと導いていくすべての試みに，強く反対する」と表明していたし，キリスト教民主同盟は「赤い子ども誘導施設」だと非難した[19]。さらに，シュテルン誌などは，集団的な保育というキンダーラーデンの方針を，夫婦交換や性的放縦と結びつけて報道した。[20]。

このように，キンダーラーデンに対して非難・中傷があり，誤解された面が少なくなかったとはいえ，キンダーラーデンとその運動は性格を変えながらも続いた。

2.4.3. 再編と制度化——80年代以降の状況

70年代後半から徐々に，キンダーラーデンの様子が変わっていった。

たとえば，子どもたち。「一人の子どもが少なくとも大人が子どもと付き合うのとちょうど同じように大人と付き合うこと」が自律（Selbstregulierung）として求められたとしても，子どもたちはこれについて行けなくなった。「日常生活上の要求を貫くことや大変な辛抱を要することについての決断を迫られるや否や，

子どもたちは退却してしまう」のである[21]。また,「かつて……キンダーラーデンでは決して砂糖菓子はありえないはずのものであったが，今日では，子どもたちは，同行者なしで街角のキオスクへ行って棒キャンデー買ってくるというように，独自の買物を行っている」といった状況[22]。キンダーラーデンで提供される食事も，にんじん料理を避けるなど子どもの好みに合わせる傾向にあるようだ。性急に大人と同様に振る舞うことを要求されても，幼児が容易にこれに応えられないのは，当然といえば当然だろう。

また，親たちの姿勢も変化した。「父母会の夕べの集いでは，もはや革命的なユートピアは話題にならず，教育学的な構想についてもほとんど話題にならない。問題となるのは，管理運営の技術に関する事柄や労働の組織についてである」とか，「従来の考え方を放棄し，私的な場所にそして子どもの事柄に引き下がってしまった」ような新しいタイプの親がキンダーラーデンに参入してきている，ともいわれる。そして，A・S・ニールが展開した反権威主義の教育の教義さえもあまりかえりみられなくなっている。「60年代に学生で親であった者たちによって熱狂的に宣伝された［ニールの］教義は，もはやこの間にノスタルジックな追憶でしかなくなっている。無気力化した親たちと過剰な要求をされる子どもたちとは，自由に行われうる攻撃という構想には背を向けている。その代わりに優先されるのが子どもの個人的看護なのだ」[23]という状況になっているのである。

このような変化があったとはいえ，「解放され，友情に満ちた親たちは，キンダーラーデンでは，子ども（Jungs）が技術的なそして乱暴な遊びに没頭している間は……傍観していなければならない。自己批判的にもう一度点検されるのは，この場合，自己の行為であり，そして，明らかにされるのは，子どもたちが古典的な性別役割分担に直面するような多くの出来事の場合，たとえば童話におけるような場合である。慰めとなるのは，子どもたちが性別役割分担から自由になるためには，こうしたことをまず一度よく“考えながら遊んで”（durch”spielen”）みなければならないのだという熟慮である」[24]というような親たちの態度は，今日まで肯定的に受け継がれているように思われる。「性別役割分担からの自由」については，後に改めて取り上げることにしたい。

いずれにしても，全体としては「キンダーラーデンは，子どもにとって今なお最良の託け場所なのである。少人数の子どもでのグループ，個人的な信頼，そして日課の弾力性が，公立の託児施設（”Kita”）においてよりも，はるかに楽しい自己発展を可能にするのだ。親と教育担当者との人格的な結びつきによって，子どもの抱えている困難な問題がより早く認識されより容易に受けとめられるようになっている」[25]という点で，今日なお積極的に評価されている。

さらに，キンダーラーデンをめぐる制度も大きく変化した。公的な保育制度の一環に組み入れられたのである。85年末のシュピーゲル誌の論説はこの点の状況を次のように伝えている[26]。

——今日，ベルリーンには400余りのキンダーラーデンがある。これらは「親主導の託児所（Eltern-Initiativ-Kindertagesstätten, EKT）」という役所での呼称の下で市政府から財政援助を受けている。市文部大臣（Schulsenatorin）のハナ＝レナーテ・ラウリーンは，——決して補助を受けた教育の促進に疑問を抱くことなく——昨年の夏に「EKTはベルリーンではもはや無視することはできない」といった広告キャンペーンを行った。親たちは新しい「ＥＫＴ」を設立することを要請され，この大臣は政府からの将来の設立資金援助を約束した。

キンダーラーデン設立のためには，親たちは社団を結成し，場所をさがして建物をたて，教育学者または教育者として養成された者を雇用しなければならない。建築基準監督署，青少年および健康局がその場を検査した場合

に「国のカネ（Staatsknete）」が融資される。１回の設立資金援助の後に，１ヶ所１日につき20マルク50ペニッヒの援助がある。この額は，この場合たいてい，賃借料と教育担当者の給与をちょうど満たす額である。――

また，キンダーラーデンへの公的な資金提供の状況は州によりかなり異なるようだ。

――たとえば，ハンブルクでは，自由な青少年福祉事業の担い手として承認されたキンダーラーデンの実費分経費は，全額支払われる。バーデン＝ヴュルテンベルクではラントと市町村が担当専門家分経費の30パーセントを毎回負担している。ニーダーザクセンでは，統一的な規定はまったく存在しないし，ハノーファーでは子どもごとに一月100マルクを支出し，オルデンブルクでは，たとえば，親たちのグループは公的援助なしでやっていかねばならない。――

以上から，親たちの意識が創設期当時とはかなり異なり，子ども中心に考えるように変化したこと（政治イデオロギーの実践施設から非抑圧的な子育てのための施設へ），これに関連して子どもたちの対応にもかなりの変化がみられたこと，キンダーラーデンの制度的安定が図られつつあることが，確かめられたと思う。

2.4.4. 最近の問題点

このような変化の中で新たな問題点も表面化してきた。

第一に，教育指針の喪失である。たとえば，ノルトライン＝ヴェストファーレン州議会の緑の党議員団青少年政策担当者は，初等教育等で実践されてきた反権威主義的傾向の教育について，反省を表明した。「よい学業成績や有利な職業を求める野蛮な競争の中で何らのチャンスも持たない者は，自己のアイデンティティを身体的強さに求める」といった状況に対して，反権威主義的な教育が有効に対処できなかった結果，ネオナチとして暴行をはたらくような子どもたちを生み出してしまったからである。これに対し，ＣＤＵとＦＤＰのスポークスマンは「左翼教師［の誤った指導］が右翼生徒を生み出した」と述べてこれに同調し，他方，緑の党の多数派（左派）は，上記の「反省」は「誤った現状認識に基づくもの」であり，解放的な（反権威主義的な）教育の歴史的意義と今日におけるその重要性を強調している[27]。

第二に，親たちと教育担当者との間にイデオロギー的なつながりが希薄になったため，教育担当者の身分が不安定になったという問題がある。例外的とはいえ「夕べの父母の集いで，ある父親と論争した教育担当者が，次の朝には解雇通知を手にしている」といった事件や，資金的にも（若干の公的補助は受けているものの）自立的な組織であるため，人員の配置や給与の支払い（不払い労働）について不十分な面も指摘されている[28]。

第三に，親の層に偏りが生じていることである。つまり，金や暇のあるものだけができる運動になってしまっているとの指摘である。「キンダーラーデンは，金か暇かその両方を持つ者のための施設になっている。フリーランサー，学者および教員，学生，［自然環境破壊や人間疎外に反対することを目的にした］対抗的企業（Alternativbetrieb）で活動している者が，こうしたことを行いうるのであるし，ずっと失業状態であるために時間のある者もそうである」。さらに，外国人や労働者の子どもたちが無意識のうちに除外されていることも指摘されている。「外国人は，教育学についてキンダーラーデンの運営者と論争するのに十分な水準に，言葉の点でほとんど熟達していないし，学問的にもほとんど精通していない」し，労働者家族出身の女性たちは「10時間のベルトコンベア作業の後では，さらに幼稚園の運営に参加するだけの力は残っていない」だろう，と[29]。

第四に，キンダーラーデンが“安あがりの施設”になっているという問題である。「キンダーラーデンへの公的助成は，ほんの限られたものである。いくつかのキンダーラーデンでは，親たちは月に300マルクまで保育料を支払うが，

……十分な開園時間を提供するに足るだけの教育担当者を有しているのは，ほんのわずかのキンダーラーデンだけである」。ベルリーン市政府は，通常の託児施設の設置の場合には45000マルク見積もるが，キンダーラーデンの場合には設立援助金として1000マルクを支出するに過ぎない。「わずかの財政的資金でどこにでも近所に，みんなに開かれた小さな分権的キンダーラーデンを設立できる」ので，キンダーラーデンは，キリスト教民主同盟政権が近年進めている公的なサービス供給の民間化（Privatisierung）政策に適合するものとすらいわれている[30]。

3．キンダーラーデンの理論と実際

3.1．キンダーラーデン運動の理論的基礎

3.1.1．心理分析思想

キンダーラーデンでの教育の理論的基礎の一つが心理分析思想である。J・ツィンマー（編）『教育学百科事典・第6巻・幼児教育』は，これと反権威主義の教育との関係を次のように説明している。

——フロイト，ライヒおよびシュミットと関連づけて，反権威主義の教育の主張者たちは，権威的性格の基礎としての厳格な超自我（ein rigides Überich）がとりわけ子どもの性的欲動の抑圧から生じるのだということを出発点としている。親は自己の超自我の命令に従って子どもを教育するものだという法則を克服することは，ブルジョア的家族形態を超えたところでしか考えられないことであった。キンダーラーデンでの子ども集団ならびに子どもと大人の集団としての共同体（Kommunen）は，独立の社会化の単位，つまり「ブルジョア的個人の革命化」のための前提となった。——[31]

フロイト理論との深いつながりは，後述のキンダーラーデンの特色のところでふれることにするが，（父）親の権威性の問題，性的な抑圧と社会的抑圧との関連性の問題などの分析とこれらに対する対抗的な実践となって，今日に至るまで受け継がれていると思われる。とくに，子どものセクシュアリティーに関する指摘は，——諸々の問題点があるにせよ——教育理論におけるフロイトの重要な功績だといってよいであろう。

これと並んで影響力を与えたのがA・S・ニールの理論と実践であった。彼によれば，厳しすぎるしつけが本能的な興味を抑制して無意識的な葛藤を生み出し，それが問題行動の原因になっているとされる。そこで彼は，精神分析の技法を応用してそれら内面の問題から子どもたちを解放したのである。彼にとって，教育の根本的使命は，真の自由人，つまり人生をたくましく肯定し，伝統的な価値観や因習を無批判に受け入れず，むしろ自分自身のものの見方に従って生き，しかもその生き方に責任を負う態度と能力をもった人間を育てることであった。このような考え方に基づく実践が“世界で一番自由な学校”といわれるサマーヒル・スクールであった。キンダーラーデンの創設期には，このような理論と実践は，「ニールは自己の教育モデルを社会と関連づけることなく，むしろ意識的にこれを回避している」ので，範例として使えない、と批判されていた。しかしその後，実践的にキンダーラーデンでの教育方法の一つに取り入れられ，一定の支持を得ることになった[32]。とはいえ，前述のように，最近ではあまり顧みられていないようである[33]。

3.1.2．権威的人格の分析

反権威主義の教育とは，「権威」の由来とその人格的・社会的影響を批判的に分析し，実践の中で克服する行為である。キンダーラーデンを実践した人々はそのために，アドルノやホルクハイマーらフランクフルト学派の権威的人格の分析をも参照した。

その理論によれば，権威性は，普遍的な人間生活の構成要素ではなく，ブルジョア的資本主義社会に特有の社会心理学的で政治的な原理にすぎない。また，権威的関係は，「ブルジョア家

族における社会化を通じて，つまり個人的に経験する父親の権威性に対して幼児期に不安と罪悪感を抱くこと（infantile Ängste und Schuldgefühle）を通じて，永続化される」。権威にすがったり追従したり（その結果ファシズムを招来してしまった）という面に見られる諸個人自身の権威的構造や，国家が権威的関係の中で身動きがとれなくなってしまっているといったような現象の原因は，「とりわけ，自己の社会化の経歴の中に，つまり（小）ブルジョア家族という権威的な狭い領域で行われた自己の教育の中に求められる」。それゆえ，「自分たちの子どもは，精神的な損害を被ることなく社会の矛盾に耐えることのできる能力，そしてとりわけ，そのような関係を変えうる能力を持つべき」なのである(34)。

このような理論に基づいて，権威主義的な社会関係を変えるために幼児期の人格形成が重要視され，そしてその際，人格を個別的にとらえるのではなく，集団として，相互関係の中で育てることが不可欠だとされ，実践された。

3.1.3. マルクス主義のテーゼ

キンダーラーデン運動へのマルクス主義の影響は，教育の再生産機能の分析，家族論および女性解放の理論，政治運動への方向づけに見受けられる。

教育の再生産機能については，権威的人格が次の世代の権威的人格を育ててしまう（しつけ，価値観の継受，政治的行動様式など）という面と，社会の階層構造の再生産（支配的な階層の子どもは高い水準の教育を受けて支配的な階層となり，貧しい階層の子どもは経済的な理由から教育を受ける機会を得られずに貧しい階層にとどまる，など）という面とがあると思われる。前述のフランクフルト学派の思想とかなり重なっていると考えてよいだろう。

家族と女性解放の理論については，キンダーラーデン運動の発生が女性の解放と密接に結びついていたし，この運動を進めたのが主に女性であったため，重要な要素になったと考えられる。レーニン，クララ・ツェトキンなどの女性解放論が参照されている(35)。性的抑圧（女性・男性の性的側面に関する心理的・社会的抑圧）の原因を単に心理分析からだけでなく，経済的な基礎，家族構造，社会と国家の権力的構造などと関連づけて分析しようとしている。

政治運動とのかかわりについては，初期においては，キンダーラーデンでの遊びの方向づけという面にでていたが，その後，後退したように思われる。毛沢東やチェ・ゲバラなどが参照されている(36)。

3.1.4. 基本的に反権威主義的な立場

当初のキンダーラーデン運動を担った人々が主として学生運動の当事者だったので，反権威的な立場で一致したのは当然のことであった。そして，前述のように，その後もこのような立場は基本的に維持されている。そこにいかなる要因が働き続けているのかは，現代ドイツ社会を考える上で興味深いが，今後の検討課題である。

3.2. 実践的な試み

3.2.1. 特色

キンダーラーデンでの教育（保育）方針の特色は次の点にあるとされる。すなわち，

①幼少期のしかも抑圧的な清潔教育と秩序教育を回避すること

②子どものセクシュアリティーを恥らいながら許容することを経て，これをオープンに肯定・支持するところにまで到達すること

③懲罰の禁止ならびに威嚇の放棄

④大人に決して服従しないよう求めること，むしろ子どもの要求を大人に対しても貫くよう支えること，である(37)。

これらのうち，特に注目すべきだと思われるのは，秩序教育（いわゆる「しつけ」）の回避，子どものセクシュアリティーへの対応（性教育），要求の実現方法の指導（政治教育）である。

キンダーラーデンで最初に体系的な教育プログラムをもったのは，シャルロッテンブルクの

グループであった。創設期の考え方を理解するために，このプログラムにそって，上記の注目点をまとめてみたい。

a）秩序教育の回避

しばしば誤解されることであるが，キンダーラーデンは無秩序な自由放任を方針としていたわけではない。むしろ，「確固たる外的な枠組みによって，子どもが自己の欲求を最大限に充足できる理性的な秩序へと向かうように手助けする」ことを方針としていた。たとえば，食事については，幼稚園内で調理し，食事は一定の時間にとるべきことになっている。食事は強制されないし，調理等の準備に参加することも強制されない。しかし，つねに誰でも準備に参加できることになっている。そして，調理への積極的な参加は重要視されない。子どもが満足すること自体が重要だからである。

掃除については，子どもたちに掃除の仕方(方針)を作成させ，これに基づいておこなわせる。子どもが作成した仕方は大人にとってたいてい無秩序であるが，これを妨げてはならないものとされる。というのは，雑然と置かれている遊び道具等が他の遊びをする場合にじゃまになることを理解するように導くなど，まず子どもの秩序観に沿うことが重要だからである。

また，昼寝をめぐっては，何人かの子どもが騒いでいるために他の子どもたちが眠れないといった問題が生じるが，このような場合には，子どもたち自身を関与させて解決するように試みるべきものとされる。

なお，「遊び」については，そのための道具をつくるところからはじめることにしている。身近なところで対象を変革し，その帰結を自分で確かめ，過程全体を認識できるように導くためである。ここでは，遊びは与えられるものでも，すでに準備されその軌道上で行われるものでもない。フレーベルやモンテッソーリの教育方法とは，このような点でも異なっている[38]。

b）セクシュアリティーの育成（性教育）

子どものセクシュアリティーを肯定的にうけとめ，性的な抑圧から解放された子どもに育てることは，キンダーラーデンの方針の大きな特徴である。シャルロッテンブルクでは次のような方針が示されている。

――子どものセクシュアリティーを肯定する態度は，大人のあらゆる行動の仕方や表現にまで貫かれるべきである。なぜなら，大人による性的な抑圧は，子どもの潜在意識の中に性的な事柄を罪の意識として固定化し，ひいては，資本主義の下で抑圧的で権威主義的な社会構造をもたらすからである（性別分業による女性に対する抑圧，など)。現状をみると，多くの子どもたち，とりわけ年長の子どもたちはあらかじめその性的欲求を強く抑圧されたり，あるいはすでに道徳的規範を受け入れていることも多い。性殖器や幼児のセクシュアリティー一般に対して嫌悪感を示したり触らせないようにして防御するというこれまで行われているやり方は，われわれの教育目標の実現にとって大きな障害だとみてよいだろう。したがって，家庭での親からの性的抑圧も見直されねばならず，キンダーラーデンでも家庭でも積極的に子どものセクシュアリティーを肯定する対応がとられねばならない。

たとえば，親は子どもの性器いじりに対して即座に止めさせたり嫌悪を示すことが多いが，このような対応をしてはならない。やるべきことは，慎重に，痛くなる危険性があることを知らせ，できれば性器と慎重につきあう方法を示すことなのだ。何人かの子どもたちは性的な問題に興味をもっているが，ストレートに口に出せないのが現状なので，キンダーラーデンでは，積極的に子どもたちの興味を呼び覚まし，子どもたちの関心に応じて本当のことを教えるべきである。――

とはいえ，キンダーラーデンでもこの問題についての深い理論的な検討と具体的な実践方法はまだ模索中であった[39]。

最近のキンダーラーデンでも，前述のように，

子どもたちが古典的な性別役割分担に出会う場面では批判的に考えられるよう配慮されている，とみてよいだろう[40]。

c）政治教育

政治教育をどうするかという問題は，創設の当初からキンダーラーデンごとにかなり異なっていたようである。たとえば，シャルロッテンブルクの方針では政治教育は取り上げられていなかった。しかし，この点は何らかの形で配慮されており，一般の幼稚園と比べた場合，キンダーラーデンの特徴となっている。

前掲の『ベルリーンのキンダーラーデン』では，全般について次のように説明されている。

——就学前における政治教育ということで理解されているのは，とりわけ，この年頃の子どもが出会う社会的紛争(たとえば，家主，管理人，警察との口論）を政治的に説明すること（われわれの社会の中で特権を持つ者の利益と抑圧されている者の利益との間の紛争だということ)，つまり，子どもがまず個人的に体験する紛争を子どもの意識のレベルで普遍化し客観化することである（子どもに，警察官が「悪い」とか「良い」とかいうのではなく，交通整理をし，デモをつぶし，迷子を助けるといった一定の役割を持っていることを説明する)。その他，親の政治的実践への子どもの関与も，政治教育に含まれる。たとえば，ビラの配布，ティーチイン（討論集会)，デモンストレーション，等である。このようなことから自ずと，子どもの集団的遊びや闘いの遊びが時には政治的内容を獲得するのである。たとえば，デモ遊び，家主に対する賃借人の闘い，ベトナムにおける戦争（子どもたちが家で見た写真やプラカードに由来する)。——[41]

また，最初に政治的な教育目標の意義を明確にしたシェーネベルガー・キンダーラーデンの具体的指針は，遊びと政治的実践を結びつける方向を提示している。すなわち，キンダーラーデンという取り組みは，幼児の社会化の側面だけでなく「生活全体を包括する批判的な社会化過程の第一段階」としても把握されねばならず，生徒・徒弟・青年労働者・学生の運動と同じ方向をとるべきものだ，と[42]。

前述のように，その後，キンダーラーデンは政治的色彩を弱め多様化したが，ハンブルクでのように，第三世界の人々との積極的交流（ニカラグアにいる子どもたちの代理親になるとか，南アフリカのアパルトヘイトに反対するパンフレット配布とか，さらにはベトナム戦争で被害を受けた子どもたちのための労働集団作りなど）というかたちで政治教育を明確に継続しているところもある[43]。

3.2.2.キンダーラーデンでの子どもの生活

1970年当時のシャルロッテンブルクのキンダーラーデンでの一日の流れを見てみよう。

——一日の始まりは午前10時。この時間までに，自動車をもつ親たちが分担して子どもたちを連れてくる。教育担当者（保育者）に加えて，毎日親たちのグループの一人が，買物・料理・清掃を助ける。買物は散歩を兼ねることが多い。その際，道路交通の勉強をしたり，午後の遊びに必要な道具（ボール箱，石，栗の実，棒，アイスのカップなど）に行き当たることもある。13時ごろに昼食。午後はたいてい集団的な遊びである。その中でお菓子や果物を食べる。子どもをいっしょに寝かしつけようとはしないが，眠くなれば寝室に運び眠るのを助ける。17時ごろ親が迎えにくることになっている。子ども同士でいっしょに帰るとか泊るという約束をしている場合には，できるだけ尊重する。時折，週末に親が集まり，作業や催物にくわわる。政治教育のために必要なデモンストレーションに親子で参加することもある。——[44]

シュピーゲル誌などでの描写から察する限り，こうした様子はその後もあまり変わっていないようである。

3.2.3. 教育担当者（保育者）・子ども・親の関わり

キンダーラーデンでの教育担当者(保育者)・子ども・親の関係は，他の施設と比べて緊密であり，その特徴点となっている。場所によって多少の違いはあるようだが，常勤の教育担当者とならんで親たちが教育（保育）面で継続的に一定の役割を担当しているところが多いようである。これは，親の協同（Elternmitarbeit）と呼ばれる活動である。「親が幼稚園に出かけ，子どもたちの集団の中でいっしょに遊んだり，工作したりする活動」であり，「一般の幼稚園ではあまり行われていないが，主に『子どもの店』や『親・子どもグループ』で実践され，参加した親のほとんどが肯定的に評価している」(45)といわれる。こうした活動の結果，キンダーラーデンの親子集団の関係は「交替でやってくる関係者であることを越えて，一種の大家族での教育となっている」(46)といわれる。

定期的に親たちが集まる「両親の夕べの集い（Elternabend）」も重要な特徴点である。これは，「夕方あるいは夜の数時間，定期的に，さまざまなテーマの下に親たちと教師が集まり，話し合いや各種の視聴覚器具の活用を通して，子どもの問題の解決をめざすもの」(47)であるが，キンダーラーデンの運営の決定を行う機関でもある。前述のように，70年代の教育改革の中で一般の幼稚園に影響を与えた運営方法である。

4．反権威主義幼児教育と現代ドイツ教育学

4.1．反権威主義の教育と反教育学

1970年代半ばに教育改革が挫折した後，改革に指導理念を提供した反権威主義教育や批判的教育科学・解放的教育学をも含めて，既存の教育学をトータルに批判ないし否定する反教育学が登場し，強い影響力を持った。反教育学とは，抑圧的ないし適応強制的な教育だけでなく，大人や学校の教育的行為そのものが子どもにとって有害だとしてこれを否定する主張である(48)。本稿では，多様で多岐にわたるこの主張の詳細に立ち入る準備も余裕もないので，反権威主義教育の位置を確かめるのに必要な限度で，両者の関係を検討しておく。

反教育学の主唱者のひとりで心理学者のアリス・ミラーは，反権威主義の教育を「申し分なく人道的かつ人間的だ」と評価しながらも，次の点を批判した。すなわち，反権威主義教育は両親のイデオロギーを子どもにたたき込んだり，性的享楽を「教育」したが，そのような操作的な教育行為の結果，「子どもは本当にわけがわからなくなってしまい，やむを得ず攻撃性に訴える」ようになってしまう，と(49)。

反権威主義の教育に対するミラーの批判は，試行錯誤の一局面を捉えたりあるいは誤解に基づくものであるとも感じられるが，重要な批判点は，①方法的にみて，反権威主義の教育も操作的であること，②内容的にみて，子どもが必要としていないにもかかわらず「反権威主義のイデオロギー」を子どもに押しつけていること，③「幼児性欲説」に基づいて子どもに対して誤った対応をしていること，だと思われる。これに対して，反権威主義の教育の立場からは，おそらく以下のような反論がありうるだろう。

第一に，ミラーは操作的だと非難するが，大人と子どもとの間に完全な「友好的関係」とか単に「見守る」だけの関係が成立するだろうか。より一般的にいえば人間の関係は何らかの意味で操作的なのではないだろうか。仮に大人の側で「友好的」と感じたとしても，子どもの側にしてみれば，身体的・精神的能力や知識・経験などの点で大人を「対等」と意識するのは困難であり，大人に対して何らかの援助を期待するのが通常ではなかろうか。したがって，大人の側が望まなくても，どこかに操作的な関係が紛れ込んできてしまうのが現実であろう。それゆえ，完全な「友好的関係」とか単に「見守る」だけの関係が成立不可能であることを前提として，操作的関係を用いながらも「操作性」を顕在化させ，批判にさらし，最終的には消去していく，という道筋が選択されるべきこととなる。

第二に，反権威主義の教育が反権威主義を指針としたのは，大人の側からの一方的な操作性を否定・克服する意図から発したものだといえよう。その基礎には子どもを「保護の客体」ではなく「権利主体」として尊重するという姿勢が存在するが，この点はおそらく反権威主義の教育とミラーに共通するものである。そうだとすると，「子ども中心主義の教育観」という点で両者には質的な差がそれほどないと考えざるをえない。

第三に，ミラーの場合には，性的抑圧についての認識が希薄なのではないだろうか。つまり，フロイトの幼児性欲説を否定するあまり，幼児期における性認識の形成の問題が見逃されているように思われるのである。性差別的な認識形成を除去しながら，性的アイデンティティの形成をどのように尊重するのかは，今後の課題であろうが[50]。

4.2. 反権威主義幼児教育の意義

反権威主義幼児教育の意義は，まず，学習と教育に内在する権威主義的関係を明瞭に意識化しただけでなく，その克服のためにさまざまな実践を試みた点に認められる。第二に，そのような思想と実践が刺激となって，――挫折したといわれることが多いが，少なくとも就学前および初等教育では――70年代の教育改革を通じて今日にまで及ぶ影響を与えていることも重要だろう。第三に，性的な抑圧を克服するプログラムを作成し意識的に取り組んだ点も，注目に値する。たとえばシュタイナー学校などは抑圧のない（少ない）教育のプログラムをきわめて体系的に整備しているように思われるが，この点の問題意識は希薄なのではないだろうか。

反権威主義教育の今後の課題としては，操作的関係を媒介としながらこれを克服する方途，性的な抑圧を除去する教育の中でのセクシュアリティー形成のあり方，キンダーラーデンのような施設が「安上がりな施設」になっているという制度的問題，などを挙げることができるだろう。

5．おわりに

大仰な副題のわりには，些細な内容にとどまってしまった。しかし，上記の課題はおそらく今日の教育（学）に共通するのではないだろうか。今後は，教育に内在する権威主義的関係を意識化し克服しようと試みている他の教育理論も視野にいれながら，セクシュアリティーの形成と教育の権威性の問題（あるいは家父長制的教育パラタイム）との関連を追究してみたい。

注

(1) Duden, *Das grosse Wörterbuch der deutschen Sprache, Bd. 4,* S. 1465参照。最近の辞典類ではもっぱら後者の意味だけを載せている。しかし，必ずしも日常語としては定着していないようである。たとえば，Der Spiegel 4/1993, S.41は，70年当時の写真に「反権威主義の幼稚園（Antiautoritärer Kindergarten）」という説明を付している。

(2) 片岡徳雄『学習と指導――教室の社会学』放送大学教育振興会，1987年，100～103頁。

(3) 小川正通「自由主義諸国の就学前教育と近年の動向」梅根悟（監修）・世界教育史研究会（編）『世界教育史体系22・幼児教育史Ⅱ』講談社，1975年，203～204頁，あるいは岩崎次男・天野正治（編）『世界の幼児教育5・ドイツ』日本らいぶらりい，1983年，152～153頁，244～246頁など参照。

(4) 岩崎・天野（編）・前掲書169頁。同書は，改革の例として，ノルトライン＝ヴェストファーレン州および西ベルリーンの場合を紹介している（154頁，185～186頁，242頁，268～276頁，290～313頁）。前者は幼稚園法で両親参加の組織形態を定めている点，後者は5歳児向けの予備学年制度を設けた点が特徴である。ヨーロッパ全体の改革動向については，宍戸・木下・勅使（編著）『幼児教育学の初歩』青木書店，1992年，195頁以下参照。今日のドイツにおいて，「公的な」共同保育機関としてあげられるのは，①保育所（誕生から3歳までの子どもたちが，1日中世話を受ける場所，②委託保母（子どものあるドイツ国籍の既婚女性が，自宅で2人までのよその子どもの面倒

をみるというもの)，③養育家庭(養子縁組はしないが，よその子どもを四六時中預かり世話するもの)，④幼稚園(3歳から6歳まで終日子どもを養育する機関)，⑤統合幼稚園（健常児と障害児をいっしょに教育する施設)，⑥キンダーラーデン，の6種類である。これ以外にも，市民グループによる小人数の子ども養育組織が散在する。

教育内容の面ではシュタイナー幼稚園が注目されるが，本稿では検討できない。

(5) 以上については，H・K・ルップ（深谷満雄訳）『現代ドイツ政治史』有斐閣，1986年，229～237頁，242頁，286～289頁参照。

(6) *Berliner Kinderläden*：*Antiautoritäre Erziehung und sozialistischer Kampf,* Köln/Berlin 1970, SS.22-24.

(7) Kein Platz für Kinder im Lande Fröbels, aus＞Tagesspiel＜7.4.1969, in：*Berliner Kinderläden*, a.a.O., SS.147-148. 近況については，Der Spiegel 36/1993, S.106参照。最近では保育科が有料となり，引き上げの傾向にある。

(8) Kossolapow, L., Kinderläden, in：*Lexikon der Pädagogik 2*, Freiburg/Basel/Wien, S.432.

(9) *Berliner Kinderläden*（Anm.6），S.13-14. フレーベル幼稚園も含めた伝統的な幼稚園全般に対する批判については，vgl. Briel, Rudi, Gesellschaftliche und politische Bestimmungsprozesse im Elementarbereich, in：J. Zimmer（hrsg. v.)，*Enzyklopädie Erziehungswissenschaft Bd. 6*：*Erziehung in früher Kindheit,* S.125f.

(10) Böhm, Winfried, *Wörterbuch der Pädagogik,* 13. Aufl., Stuttgart, S.323.

(11) Kossolapow(Anm.8), S.432.

(12) A.a.O., SS.432-433.

(13) A.a.O., S.432.

(14) A.a.O., S.433.

(15) *Berliner Kinderläden*(Amn.6)，SS.33-34, 73-77.

(16) Der Spiegel 25. April 1977, S.70.

(17) Rabe-Kleberg, Ursula, Antiautoritäre Erziehung, in：J. Zimmer(hrsg. v.)，a.a.O.(Amn.9)，SS.291-292.

(18) Der Spiegel 25. April 1977, S.70-71.

(19) Der Spiegel 30. Dezember 1986, S.126, 128.

(20) Gebhardt, Heiko, Kleine Linke mit grossen Rechten, 》Stern《 Heft 9, 1969, in：*Berliner Kinderläden*(Anm.6)，SS.154-156. なお，この記事は後日削除された。

(21) Der Spiegel 25. April 1977, S.70.

(22) Der Spiegel 30. Dezember 1986, S.127.

(23) Ebenda.

(24) A.a.O., SS.126-127.

(25) A.a.O., S.128.

(26) A.a.O., S.127.

(27) Der Spiegel 4/1993, S.41ff.

(28) Der Spiegel 30. Dezember 1986, S.127.

(29) Ebenda.

(30) A.a.O., S.128.

(31) Rabe-Kleberg(Anm.17)，S.291.

(32) 細谷ほか（編）『新教育学大事典5』第一法規出版，1990年，397頁，*Berliner Kinderläden*(Amn.6)，S.78参照。

(33) 「サマーヒル・スクール閉鎖の危機」を報じたDer Spiegel 8/1994, S.80ff. によれば，ドイツでもこの種の学校が同様の困難に直面している，といわれる。

(34) Rabe-Kleberg(Anm.17)，S.290.

(35) *Berliner Kinderläden*(Amn.6)，S.68その他の箇所を参照。

(36) Der Spiegel 25. April 1977, S.71, *Berliner Kinderläden*(Anm.6)，S.46-50参照。

(37) Rabe-Kleberg(Anm.17)，S.291.

(38) *Berliner Kinderläden*(Amn.6)，SS.96-97, 101-103.

(39) 以上については，a.a.O., SS.103-107.

(40) 前述の2.4.3参照。

(41) *Berliner Kinderläden*(Amn.6)，S.139.

(42) A.a.O., S.139-140.

(43) A.a.O., S.127.

(44) *Berliner Kinderläden*(Amn.6)，SS.116-118.

(45) 岩崎・天野（編）・前掲書（注・3）245-246頁。

(46) Kossolapow(Anm.8)，S.433.

(47) 岩崎・天野（編）・前掲書（注・3）244頁。親の参加は，最近のヨーロッパ諸国に共通する改革方向でもある。宍戸ほか・前掲書（注・4）226頁以下参照。

(48) 反教育学をめぐる理論状況については，下地秀樹・太田明「反教育学と教育学の〈あいだ〉——80年代（西）ドイツの場合——」東京大学教育学部

紀要30巻（1990年）１頁，鳥光美緒子「反教育学」細谷ほか（編）『新教育学大事典』（注・32）536頁，太田明「ドイツにおける『教育終焉』論とその周辺(1)～(7)」教育543-554号（1991-２年），同「ポスト・モダンの教育終焉論――再論」愛知大学文学論叢106集（1994年）１頁など参照。

(49) アリス・ミラー，山下公子（訳）『魂の殺人』新曜社，1983年，128頁以下，同『禁じられた知』新曜社，1985年，227頁以下など。

(50) 最近の試みとして，Buttner, Christian, Dittmann, Marianne(hrsg.v.), *Brave Mädchen, böse Buben?, : Erziehung zur Geschlechtsidentität in Kindergarten und Grundschule,* Weinheim ; Basel ; Beltz, 1992など。ピアジェ理論を応用した構成論の幼児教育（Constructivist Early Education）やバンクストリート（自由保育）の理論と実践も，本稿のテーマからすると興味深いが，これらの理論や実践においても，このような論点についての検討はまだ不十分であるように思われる（R・デブリーズ，L・コールバーグ，加藤泰彦(監訳)『ピアジェ理論と幼児教育の実践――モンテッソーリ，自由保育との比較研究――(上・下)』北大路書房，1992年など参照)。

〈Inhalt〉

1. Einleitung
2. Entstehung und Wandel der Kinderladenbewegung
2.1. Kinderladen und Wandel der Kleinkindpädagogik in Deutschland
2.2. Hintergrund
2.2.1. Soziale Situation am Ende der 60er Jahre
2.2.2. Situation der Kinder
2.2.3. Kritik am klassischen Kindergarten
2.3. Kinderladenbewegung
2.3.1. Konzeption des Kinderladens
2.3.2. Ziel und Leitidee der Kinderladenbewegung
2.4. Ablauf der Kinderladenbewegung
2.4.1. Entstehung : Ende der 60er Jahre
2.4.2. Entwicklung und Rückgang : 70er Jahre
2.4.3. Institutionalisierung : 80er Jahre
2.4.4. Neue Probleme
3. Theorie und Praxis der Kinderladenbewegung
3.1. Theoretische Grundlagen
3.1.1. Psychoanalytische Theorie
3.1.2. Analyse des "autoritären Charakters"
3.1.3. Marxistische Theorie
3.1.4. Antiautontäre Einstellung im Grunde
3.2. Praxis im Kinderladen
3.2.1. Eigenschaft der Erziehung im Kinderladen
a) Ablehnung der Ordnungserziehung
b) Ausbildung der Sexualität (Geschlechtserziehung)
c) Politische Erziehung
3.2.2. Alltagsleben im Kinderladen
3.2.3. Erziehungspraktiker(innen), Kinder, Eltern : Elternmitarbeit
4. Antiautoritäre Kinderladenbewegung und die Pädagogik der Gegenwart
4.1. Antiautoritäre Erziehung und Antipädagogik
4.2. Bedeutung der Kinderladenbewegung
5. Schlußbemerkung